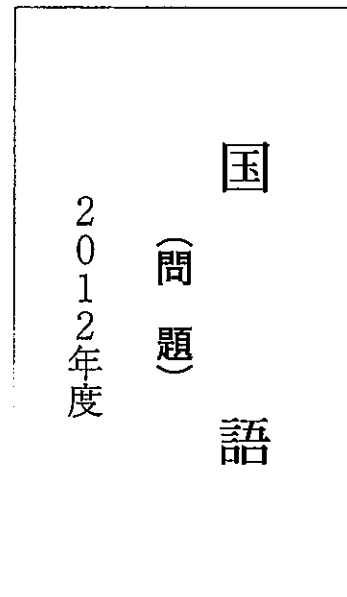




<2012 H24060111>

注意事項

- 1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 受験番号および氏名は、試験がはじまってから、解答用紙の所定欄に正確に記入すること。記述解答用紙の所定欄（2か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名のみを記入すること。

受験番号の記入にあたっては、次の数字見本に従い、正確に正しいに記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 5 マーク解答用紙のマーク欄には、はっきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムで正しいに、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

甲

〔次の文章は、「列子」「楊朱」篇の一節である。文意を鮮明にするため、一部省略した字句がある。なお、傍線部・空欄および問題に関連する箇所の一部の送り仮名、返り点は省いてある。〕

宋^ニ・国^ニ有^リ田夫。常^ニ衣^{ミテ}縕^ヲ・廣^ヲ、僅^ニ以^テ過^ス冬^ヲ。暨^{オヨソデ}春^ニ東作^シ、自^ラ曝^ス於^ニ A。不^レ知^ル天下之有^ル広廈^ヲ・隩^ヲ室^ヲ、縣^ニ續^ニ狐^ヲ・貉^ヲ。顧^{ミテ}謂^フ其妻^ニ曰^ク、「負^フ日^ヲ之^ヲ暄^ニ、人^ニ莫^シ知^ル者^ヲ。以^テ獻^{ゼン}吾^ガ君^ニ。將^シ有^ル重^ニ賞^ヲ」。里之富室告^{ゲテ}之^ニ曰^ク、「昔^ニ人^ニ有^リ美^シ芹^ヲ者^ヲ。對^{シテ}鄉豪^ニ稱^ス之^ヲ。鄉豪取^{リテ}而^シ嘗^ム之^ヲ、蜚^シ於^ニ D。慘^ニ於^ニ腹^ヲ。衆^ニ晒^{ワラフ}之^ヲ。其^ノ人^ハ大^ニ慙^ハ。子^ハ此^ノ類^ニ也。」

〔注〕「縕廣」……くす麻などを入れて作った着物。

「広廈隩室」……大きな家と暖かい部屋。

「縣續狐貉」……綿と毛皮。

「芹子」……せり。

問一 問題文甲の空欄

A

および空欄

D

に入る最も適当な語を、次のイ～ホの中から一つずつ選び、マーク解答用紙に答えよ。

A イ 水 □ 風 ハ 火 ニ 雨 ホ 日

D イ 耳 □ 指 ハ □ ニ 首 ホ 掌

問二 問題文甲の傍線部 B

「將有重賞」をひらがなで書き下した文として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ もちひてしやうをおもんずるあり。

ロ もつてぢゆうしやうあらんとす。

ハ ひきゐてぢゆうしやうあらんとす。

ニ まさにぢゆうしやうあらんとす。

ホ しやうにしやうをおもんずるあり。

問三 問題文甲の傍線部 C

「称」はどのような意味か。その意味を表す漢字二字の語を、甲の文中にある漢字一字を「称」の前か後に加えて作り、楷書で解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問四 問題文甲の傍線部 E

「子」は誰を指すか。次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 田夫 □ 田夫の妻 ハ 吾が君 ニ 富室 ホ 郷豪 ヘ 衆

乙

〔次の文章は、和歌に詠まれる語句や表現について諸書を引きながら考証した顕昭著の歌学書「袖中抄」の一節である。引用される書名等は太字とした。空欄 甲 には、問題文甲と同じ内容の逸話が引かれている。なお、本文には省略した部分や改変した箇所がある。〕

芹摘^{せうぢく}みし昔の人も我がごとや心にものはかなはざりけむ

顕昭^{けんしやう}いはく、芹摘^{せうぢく}みし昔の人とは、家々の髓^{ずい}脳^{（注）}にさまざまに言ひたれども、確かなる証文も見えず。なほ、猷^{けん}芹^{（注）}といふ本文こそ、さもと聞こえ侍れ。

童蒙抄にはく、「これを、庭の草をけづる者、その家のいつき娘の芹を食ふを見て、心ざしわりのなきが故に、芹を摘みて奉りけりなど、昔より言ひ伝へたる、確かに見えたる事やはあらむ。文選の与山巨源絶交書にはく、「野人の、背を炙ることを快く、芹子を美しとする者あり。これを至尊に献ぜまく欲す。区区の意ありと雖も、また已におろそかなり」と。注にはく、「

甲

」と云々。

されば、この歌の心は、我が心によしと思ひて言ふ事を用ゐられぬ事を恨みて詠めるなるべし」。

この義、愚意にかなふ。よりて、まづ注して、これを載するなり。

綺語抄にはく、「昔、あさましかりし賤の男の、殿ばらの南面にて掃除などせしに、思ひかけず御簾を風の吹き上げたりけるに、内にいつく娘の、芹を食ひてありけるを見て、人知れず、わりなく、心ざしありて思へども、甲斐なく

F

」と云々。

(注4)

無名抄にはく、「これは、文書に献芹と申す本文候へど、かなひ候はず。ただ、物語に人の申すは、九重の内に、

主殿司などにや、

(注5)

朝清めする者の、庭掃きたる折に、にはかに風の御簾を吹き上げたるに、後のもの召しけるに、芹

と見ゆるものを召しけるを見て、人知れずもの思ひになりて、

G

今一たび見奉らむと思ひけれど、すべきやうも

無かりければ、召しし芹を思ひ出でて、芹を摘みて、御簾の風に吹きあげられたりし御簾のあたりに置きけり。年を経れども、させるしるしも無かりければ、つひに病になりて、失せなむとしけるほどに、目にも明らめで死なむがいぶせさに、「この病はさるべきにてつきたる病にはあらず。しかしありし事によりて、もの思ひになりて失せぬるなり。

我をいとはしと思はば、芹を摘みて功德につくれ」と、息の下に言ひて失せ果てにけり。その後、言ひ置きしごとくに、芹を摘みて仏に参らせ、僧に食はせなどぞしける。それが娘の、その宮の女官になりて侍りけるが、この物語をしけるを聞こし召して、あはれがらせ給ひて、「我こそ芹をば食ひて、さる者には見えたりしやうに覺ゆれ」とのたまひて、その女官を常に召して、あはれにせさせ給ふ。その後は、嵯峨の后とぞ申しける」と云々。

H

奥義抄にはく、「問ひていはく、『芹摘みし昔の人といふ古歌を、あるは、後の芹召しけるを、庭を掃く者、おのづから見奉りて、思ひになりて、召ししものなりとて、芹を摘みて仏僧などに奉りしことのあるなりと言へり。あるは、献芹といふ本文の心なりと申すは、いづれにつくべきぞ』。答へていはく、『いづれと定めがたし。ただし、ある人の語りしは、昔、大和国に猛者ありき。家には山を築き、池を掘りて、いみじき事どもを尽くせりけり。門守の姫の子なりける童の、真福田丸といへるありけり。池のほとりに至りて、芹を摘みける間、猛者のいつき姫君、出でて遊びけるを見てより、この童、おほけなき心つきて病になりて、その事となく臥せりければ、母あやしみて、故をあながちに問ひければ、童この由を語るに、すべてあるべき事ならねば、我が子の死なむ事を歎くほどに、母もまた病に臥しぬ。その時にかの家の女房、この女の宿に立ち入れるに、二人の者の病み臥せるを見て、あやしみて問ふに、女いはく、させる病にあらず、しかしかの事の侍るを思ひ嘆くに、親子死なむとするなりと言ふ。女房笑ひて、この由を姫君に語るに、姫君あはれがりて、やすき事なり、はや病をやめよと言ひければ、童も親もかしこまり悦びて、起きてもの食ひなどして、例のごとくになりぬ。姫君の言ふやう、しのびて文など通はさむに、手書かざらむ口惜し、手を習ふべし。童悦びて、一日二日に習ひつ。またいはく、我が父母死なむ事近し、その後は何事も沙汰せさすべきに、文字知らざらむわろし、学問すべし。童、また学問して、もの見明かすほどになりぬ。またいはく、しのびて通はむに童は見苦し、法師になるべし。すなはちなりぬ。またいはく、その事となき法師の近づかむあやし、心経大般若など読むべし、祈りせさするやうにもてなさむと言ふに随ひて、読みつ。またいはく、なほいささか修行せよ、護身などするやうにて近づくべしと言へば、また修行に出で立つ。姫君あはれびて、藤の袴を調じとらす。片袴をば自ら縫ひつ。これを着て修行しありくほどに、姫君隠れにければ、その由を聞きて道心を起こして、ひとへに極楽を願ひて、尊き聖にて失せぬ。弟子ども、後事に行基菩薩を導師に請じたるに、礼盤に上りていはく、真福田丸が藤袴、我ぞ縫ひし片袴と言ひて、鉦打ちて、異事も言はで下りぬ。弟子あやしみて問ひければ、亡者智光は必ず往生すべき縁ありしものの、はからざるに世間に食着して、惡道に行かむとせしかば、我が方便にてかくはこしらへ入りたるなりとなむありける。姫君は行基菩薩の化身。行基は文殊なり。真福田丸は智光なり。これは浮きたる事にもあらず。人の文殊供養しける導師にて、仁海僧正ののたまひけるなり。さて、芹摘みし昔の人といふ歌を詠じて、この心を詠めるとなむのたまひける」。

私にいはく、献芹はたしかに古き本文なり。その心も、この古歌にあひかなふか。掃除に唱ふる事は、たしかなる事無き説か。嵯峨の後の事、かけまくも恐し。また、芹を御簾のあたりに置くことも信じがたきか。また、小野僧正説法の条、不審なり。

(注) 1 「髓脳」…和歌の法則や奥義などを記した歌学書類。 2 「本文」…ここでは漢籍等に見える典拠のこと。

3 「区々の意」…思慕の情。 4 「無名抄」…源俊賴編の歌学書「俊賴髓脳」のこと。

5 「主殿司」…宮中の清掃などの雑務を担当する役所、またその職員。 6 「心経大般若」…経の名称。

7 「礼盤」…法会の際に、導師(首座の僧)が上る高座。 8 「小野僧正」…仁海(九五四―一〇四六)のこと。

問五 問題文乙の縮語抄の引用部分中に含まれる形容詞の活用形の種類を、次のイ〜へからすべて選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 未然形 ロ 連用形 ハ 終止形 ニ 連体形 ホ 已然形 ヘ 命令形

問六 問題文乙の傍線部 F・H・I の意味として最も適当なものを、それぞれ次のイ〜二の中から一つずつ選び、マーク解答用紙に答えよ。

F イ 今さらどんな苦勞をしても甲斐もなくなってしまった。

ロ 一切の望みが断たれた結果重い病氣となってしまった。

ハ いっちょ夢のさ気尋るが事、そのまま死んでしまった。

ニ まったく思いが実現することもなく終わってしまった。

H イ 目をおかけになった。

ロ 罪滅ぼしをなさった。

ハ 十分礼を尽くされた。

ニ 深く後悔をなさった。

I イ 高ぶる感情を抑えることができず

ロ 小さな胸に余る悩みに疲れ果て

ハ 身の程知らずの気持ちを抱き

ニ 幼心に恋しいと思い初めて

問七 問題文乙の空欄 **G** に入る最も適当な語句を、次のイ〜ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ をさをさ ロ やをら ハ なんぞ ニ いかで ホ あに

問八 問題文乙の傍線部 J「しかしかの事」の内容を示す一文を見出し、その最初の三字と最後の三字を解答欄(記述解答用紙)に書き入れよ。なお、句読点等も一字と数えること。

問九 問題文乙の傍線部 K「我が方便にてかくはこしらへ入りたるなり」とは、結局、具体的に何を何になしたというのか。そのことを説明するために、左の空欄 X・Y に入れるのに最も適当と考えられる三字以上五字以内の語句を、それぞれ奥義抄の引用部分の中に見出し、解答欄(記述解答用紙)にそのまま書き入れよ。

X を Y になした。

問十 問題文乙が引用する奥義抄の、「答へていはく」の部分(「」に括られている)では、「芹摘みし昔の人も…」の和歌を詠じたのは誰だとされていることになるか。次のイ〜ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 姫君 ロ 行基 ハ 文殊 ニ 智光 ホ 仁海

問十一 問題文乙において顕昭が述べている内容に合致するものを、次のイ・ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 「芹摘みし昔の人」とは、いずれにせよ身分の高い女性を慕う男性の物語を背景とした表現と断定できる。
ロ 「芹摘みし昔の人」に関し綺語抄は、童蒙抄・無名抄・奥義抄などの説を全て否定し、独自の説を立てる。
ハ 「芹摘みし昔の人」を分析すると、仏教の深い教えがこめられており、芹は功德を積む食材と考えられる。
ニ 「芹摘みし昔の人」の和歌は、あくまで中国の故事にもとづいて創作されたものと考えるのが妥当である。
ホ 「芹摘みし昔の人」は、その解釈に多様な説があるため、正しい結論を得ることが甚だ困難となっている。

問十二 問題文乙の末尾近くに登場する小野僧正仁海が生存していた時代(注8参照)に成立した作品を、次のイ・ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 宇治拾遺物語 ロ 源氏物語 ハ 太平記 ニ とはすがたり ホ 日本霊異記

(二) 次の文章は、佐佐木幸綱「人間の声——私説現代短歌原論——」の一節である。著者は短歌を詠むことを「走る」ことに喩え、太宰治「走れメロス」の主人公が信実、愛、正義のために走らねばならなかったことや、マラソンランナー円谷幸吉(東京オリンピック銅メダリスト)が、本音では父母の側で暮らしたかったにもかかわらず、国民の期待に応えるために体力の限界まで走り続けなければならなかったことを語り、その後次の文章を続けている。これを読んで、あとの問いに答えよ。

短歌は方法ではない。志である。へ走るへ志である。千三百年の伝統をひつくるめてクイックエグのよう(注1)にヤツとひつつき、その伝統のしたたりにびしょ濡れになりながら、へにもかかわらずへねばならずへ走る以外、現代の歌人の生き方はない。走者の孤独、激しさ、悲劇性、いさぎよさ、不吉をひき受けて充実しきるほかに道はない。

短歌形式を選ぶということは、このように本来的にモラリステイックな行為なのである。そして、だからこそ生身の自分を越える表現を獲得しうる僥倖を期待する不遜が許されるのである。私はこんな情景をイメージする。まっ暗な荒野を充実しつつ疾走する走者。彼を一瞬天上からの雷光が刺し貫いて大地に刺さる。短歌形式が走者である歌人を通してみずからうたうのである。歌人がうたうのではない。千三百年の血がうたうのだ。うまく言いあらわせないが、短歌形式の **A** 力学に憑かれて日本人の血の底をぐりぬけることによって、彼自身が拡大され、同時に普遍化される²とも言いえておこうか。千三百年の形式は重い。走らないためにどんなに多くの人間が天よりの雷光に焼き殺されたことか。

² この天上からの雷光を信することができぬ、あるいはまた、あの欲望に憑かれて走った男の **B** な充実を選ばずに、神の視座にしようとするものは、なにも短歌を選ぶ理由はないはずである。

それでは、私の場合、へにもかかわらずへねばならぬと、決意させ、へ走るへ情熱をかきたてるものは何か？

それに答える前に、順序として、短歌が成り立つ基盤について触れておこう。

短歌は、**イ**「他者への信頼」を基盤として成り立っているのだ。主体の、複雑で多面的な、しばしば分裂^ロさせている意志、感情、イメージ、ときには主体自身その全体がどうなっているか捉えきることができぬ、まして伝達が可能かどうか全く心もとない内面を、わずかに三十一拍の中に充填する主体を励ますのは、多面的で複雑なときには分裂している意志、感情、イメージのごく一部分であるその核心を提示することによって、**ホ**他者がその全体を感得してくれるだろうという信頼である。

例をあげよう。近代歌人でこの「他者への信頼」を露骨にみせているのは石川啄木である。

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

たとえば湯川秀樹はこの歌を次のように鑑賞する。

「……『いのちなき』(の歌)は私にとって、特別に意味深く感ぜられる。自然界の真理をつかもうと、どんなに努力しても、砂のようにさらさらと指のあいだから抜けていってしまう。そういうもどかしさ、私が何度も経験した気持、それがこの歌によって実に見事に表現されていると私は思う。啄木自身はもつと違った気持を表現したのであるが、そのせんさくは私には不必要である……」

3 啄木は「もつと違った気持を表現したのである」というところが重要である。老母を浜民村に残し、妻子を盛岡の実家にあずけて、わずかに妹を伴って虚無的なあるいは悲愴な気持ちで北海道に渡った、そんな時期の啄木の哀傷がこの歌の背景にあるという。しかし、たとえば作中の「砂」は、岩崎白鯨が「啄木と私は好く大森浜へ行った。啄木の歌集にある海岸や砂原の歌は皆大森浜の歌だ」と言っているように、啄木の原体験をせんさくすれば大森浜の砂だったかもしれないが、公園の砂場の砂でも、マイアミビーチの砂でも、あるいは「真理の砂」でもよいように表現されており、また事実そうした砂であったかもしれないのだ。啄木の短歌にはこのように **C** を消し去ろうとする姿勢が濃厚である。「一握の砂」巻頭のこの歌を含む海岸や砂原でうたった歌十首だけを見ても、このことは十分に納得できるはずである。彼は砂原にいた体験をうたっているのではない。啄木はその体験を通して感得した、湯川の言をかりれば、「もどかしさ」をうたおうとしているのだ。だが啄木自身「もどかしさ」の全体を捉え得ているわけではない。啄木はこの「もどかしさ」の彼なりの核を「他者への信頼」に支えられて表現したにすぎないのであり、その全体は、たとえば湯川が湯川なりの「もどかしさ」の核と啄木の「もどかしさ」の核とを融合させることによって、はじめてその一面をあらかにするのである。

私はこの享受者が作品の全体を完成するために作品に参加することを、読者が作者と「共犯関係」を結ぶ、と呼んでいる。つまり、啄木は「他者への信頼」に励まされて、この「共犯関係」を期待しつつ短歌を詠んでいるのだ。

だから、啄木は「違った気持を表現した」というより、違った境涯^{きょうがい}にあったために同じ気持ちの別の側面を射照した、と言うほうが正確であろう。

どのようなジャンルであれ、作者と享受者の関係は、大なり小なり作品を媒体にして、この「共犯関係」を期待する。しかし、短歌の場合は、この期待のみによって成り立っていると一言でも過言ではない点にその特色がある。「他者への信頼」なくしては、そもそも短歌それ自体が生まれなかっただろう、と私は思う。

万葉集の三大部立が、雑歌・相聞・挽歌の三部立であるのは、たまたまそうあるのではないのだ。社会への信頼が雑歌を、**D** への信頼が相聞歌を、**E** への信頼が挽歌を、それぞれにその基盤において支えているのである。もし、これら「他者への信頼」がなかったとしたならば、短歌は存在し得なかったであろうことは確実である。

わが里に大雪降り大原の古りにし里に落^おちまくは後^{あと}

天武天皇

わが岡の霧^{おがみ}に言^いひて落^おちしめし雪の摧^{くだ}けて其処に散りけむ

藤原夫人

この馬鹿馬鹿しいほど大らかな気持ちのやりとりの背後にあるのは、相手に対する絶対的な信頼以外の何ものでもない。

以上記してきたように、私は短歌を、「他者への信頼」を基盤に、他者との「共犯関係」を期待し、そのことによって全体を指向する形式として捉える。短歌を「見る」形式とは思わない。すでに有名な塚本邦雄の「短歌考幻学」の一節「もともと短歌といふ定型短詩に、幻を見る以外の何の使命があらう」との見解にもだから同じがたい。私には **F** を幻として捉える勇氣はない。

ここで、再び上の問いをくり返そう。私は、何に励まされてへにもかかわらずへねばならぬとの情熱をかき立ててへ走るのか? 答えはすでに明らかであろう。人間の全体の実現、モラヴィア風^(注2)に言えは、手段としての人間を、目的としての人間にとりもどしたい欲望に支えられて、へにもかかわらずへねばならぬとみずからを励ましつつへ走るものである。

(注) 1 「クイークエグ」…メルヴィルの「白鯨」に登場する異教徒。彼は港の荷揚げ人夫として働いていたとき、荷物運搬用の一輪車を与えられるが、彼にはそれをどのように使ったらいいのかわかりず、しばらく考えたすえに、彼は縛りつけられた荷物もろとも、エイツと車を肩にかつて歩きだした。

2 「モラヴィア」…アルベルト・モラヴィア(一九〇七—一九九〇)、イタリアの作家。

問十三 傍線部1「生身の自分を越える表現を獲得しうる僥倖を期待する不遜」の意味として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 自己の才能ではとても考えられないような突飛なすばらしい詩句を得て、傑作を偶然に生みだすことを願う傲慢さ。

ロ 自分の発したことが自己の意識を超えて和歌の長い伝統に偶然にも共鳴して、輝きを帯びることを願う厚かましき。

ハ 自己の肉体が発したことがその身体的な束縛を脱して、宇宙的な広がりをもつ神の視座にも到達し得るといふ奢り。

ニ 自分も気づかずにいた自己の内なる能力が開花して、歴史に残るようなすばらしい名歌を詠むことができるという思い上がり。

ホ どこまでも走りつづける身体的な行動が自己の能力の限界を超えて、これまで体験したことがないような世界を開示してくれることを望む傲岸さ。

問十四 空欄 A B に入る語句として最も適当なものを、それぞれ次のイ～ホの中から一つずつ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 永久的 ロ 偶発的 ハ 直線的 ニ 経験的 ホ 自律的 ヘ 悲劇的

問十五 傍線部2「天上からの雷光」という比喻によって表現されたことからは、本文中の波線部イ～ホの中のどれに最も近い。その記号を一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

問十六 傍線部3「啄木は「もつと違った気持を表現したのであろう」というところが重要である」について、それはなぜ重要なのか。その理由として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 湯川秀樹は自己の体験に照らして啄木の短歌を鑑賞したが、それは啄木が意図したものとはまったく違っていたから。

ロ 啄木の生涯にとって渋民村で過ごした時代が非常に重要で、啄木の短歌を鑑賞するうえで無視することができないから。

ハ 啄木の短歌には読者がそこから読みとることができるのとは別に、啄木自身の辛く苦しい実生活の体験が裏打ちされているから。

ニ 啄木の短歌はまったく異なった体験をもった人が鑑賞しても、そこに表現された個人的な感情は抽象化されて普遍的なものとして受け止められるから。

ホ 啄木と湯川秀樹はまったく違った境遇にあったためにそれぞれの体験を通して異なった短歌観をもち、同じ短歌からもそれぞれ違った意味を引き出すことができるから。

問十七 空欄 C に入る最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 体験の痕跡
ロ 日常の生活
ハ 推敲の過程
ニ 存在の記憶
ホ 過去の罪障

問十八 空欄 D E に入る最も適当な語句を、それぞれ次のイ～ホの中から一つずつ選び、マーク解答用紙に答えよ。

D イ 両親
ロ 子ども
ハ 大自然
ニ 生ある者
ホ 愛する者

E イ 死者の魂
ロ 後世の子孫
ハ 彼岸の救済
ニ 自己の守護神
ホ やおよろずの神

問十九 空欄 F には、文中で用いられている「」またはへで括られた語句が入る。その語句を解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二十 筆者は現代において短歌を詠み続けることをどのようにとらえているか。最も適当なものを、次のイ・ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 現代において短歌を詠み続ける當為は、伝統にはむかつて、天につばするような孤独な作業に似ており、マラソンランナーのようによほどの忍耐力と義務感に支えられた強い意志をもたなければ、持続することができない。
ロ 現代において短歌を詠み続けるためには、マラソンランナーにも比せられるほどの体力と意力をあわせもち、日々の練習によってその困難を乗りこえるために、どんなことがあっても毎日短歌を詠み続けなければならない。

ハ 現代において短歌を詠み続けることは、短歌という形式との日々の格闘であり、千三百年の伝統に押しひしがれずに他者との絆を信じながら、自己実現に向かって走り続けるマラソンランナーのごとき志をもたなければならぬ。

ニ 現代において短歌を詠み続けなければならないのは、マラソンランナーがなぜ走り続けるか分からないのと同じように、千三百年の伝統という大いなる意思に動かされた義務感のようなもので、個人の意志を超えたところにその當為は存している。

ホ 現代において短歌を詠み続けてゆこうとすれば、石川啄木のように他者への信頼へ寄りかかりながら、自己の日常体験を詠み続けなければならない、万葉集の時代から変わらない短歌形式を信じ、マラソンランナーのように走り続けなければならない。

問二十一 石川啄木（一八八六—一九二二）は、一九〇五年に刊行した浪漫的な詩集『あこがれ』によって天才少年詩人の名を馳せたが、この詩集は与謝野鉄幹・晶子の新詩社のもとに集まった文学者たちから大きな影響を受けた。

この文学結社は刊行していた雑誌の名をもって呼びならわされているが、その誌名を、次のイ・ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ ほとときす ロ 心の花 ハ 明星 ニ 新思潮 ホ 文学界

（三） 次の文章は、ロボットが私たちの現実生活と関わりを持ち始める時代を前にして、大森荘蔵が書いた「ロボットの申し分」と題するエッセイである（一部省略した箇所とそれに合わせて原文を改変した箇所がある）。これを読んで、あとの問いに答えよ。

私はあなた方人間が私を「ロボット」と呼ぶのに異議を唱えるものです。しかしそれはこの呼称が肉体的社会的な差別であるからというわけではありません。私が「ロボット」と呼ばれるのに異議をたてるのは、私が並みの人と「できが違う」という点ではなく、この呼び名に「でくのぼう」の響きと意味があるからです。私を殺しても器物破壊にすぎないといわれているのです。私は殺されるのではなくこわされるのであり、死ぬのではなく動かなくなるだけなのだからと。

しかし私は断じて「でくのぼう」でもなく、からくり人形でもありません。私には気分が高揚するときもあれば気が沈むときもあります。美しい風物には感動しますし、醜い言動には嫌悪をもよおします。食べ物には並みの人以上に好き嫌いがありますし、好物の酒に酔って「この人間野郎め！」といった式で座を怒らせたこともあります。つまり、私には「心」があるのです。

それなのにあなた方はそれが信じられない、いや信じ切れないのです。私が街を歩いて買物をするとき、料理屋で飯を食うとき、店の主人やウェイターは私を全く並みの人間であると信じています。私の外貌、私のキョソ¹、私の振舞が完璧に人間のものであるばかりでなく、私にいわば人間の匂いを感じるからです。私自身が彼らに感じると同じ匂いをです。ところが何かのはずみで私がロボットだということがわかると彼らの態度は一変します。ある人は、よくも図々

はずいぶん寛容で鷹揚なアニミズムをとっておりました。獸、魚、虫はいうにおよばず、山川草木すべて心あるものだったのです。それに較べ近頃の人々のはひどくせちがらいアニミズムです。緣故血緣關係を中軸にしたアニミズムだといえましょう。その 6 性が人々の心に根深くしみついているがために私が大変迷惑をこうむっているのです。どうして私にも心を「吹き込んで」くれないのですか。いや既に吹き込んでいることを認めて下さらないのですか。どうか今少しあなたの方の心を開いて私もあなたの方同士の間のアニミズムの中に入れていただきたい。それによってあなたの方の人間性もより豊かになるうというものです。

(注) R・P・ドーア、松居訳『江戸時代の教育』付録二、寺子屋訓戒集の一例。

問二十二 空欄

A

D

には次のイ、ホのいずれかの文が入る。それぞれ最も適當なものを選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 他人の心を「信じる」ではなくて、あなたが他人の心を「創る」のです。

ロ 他人の心の有無は「科学的事実」ではないのです。

ハ つまり、人間ではなくなっているでしょう。

ニ ここに私の不満があるのです。

ホ 薄気味が悪いのです。

問二十三 傍線部1のカタカナを漢字で、傍線部5の漢字の読みをひらがなで、それぞれ解答欄(記述解答用紙)に記

せ。ただし漢字は楷書で正確に書くこと(乱雑な文字や字画の曖昧な文字などは不正解とする)。

問二十四 傍線部2「感情移入」という言葉がありますが、移入ではなく移出であり投射であり投影なのです」について、

このように述べている理由として最も適當なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に記せ。

イ 感情移入というのは自分の感情を対象に移し入れることだが、この場合には対象が自分の子供なので、つい自分と同じように考えて親の気持ちを勝手に押しつけることになりがちだから。

ロ 感情移入という言葉はあるものの、感情が客観的なものではない以上、そのような曖昧なものを対象に移し入れるということは実際きわめて漠然とした影のようなものを投げかけることだから。

ハ 感情移入の前提としてお互いの心を尊重することが必要だが、しかし実際には相手の心を確かめる以前に自分を基準にして、こうだろうと思う心を恣意的に相手に投げつけていることが多いから。

ニ 感情移入というのはその対象が何であれじつは大変むずかしいものであり、ましてやこの場合は相手が子供なので、自分が子供であったときのことを思い出し推し量った心で子供を包んでいるのだから。

ホ 感情移入とは相手の気持ちや感情、要するに相手の心のあり方に共感することだが、この場合には相手の心を確かめてそうしているのではなく、相手になりかわった自分の心を送り出して投げかけているのだから。

問二十五 空欄

3

6

に入る語句として、それぞれ最も適當なものを、次のイ、ホの中から一つずつ選び、マーク解答用紙に答えよ。

3 イ 道徳

ロ 意欲

ハ 宗教

ニ 人間

ホ 心情

ヘ 原理

6 イ 正当

ロ 排他

ハ 伝染

ニ 普遍

ホ 特異

ヘ 必然

問二十六 傍線部4「人、人、人、人、人、人、人、人、人、人」はどのような意味か。問題文の趣旨に則して四

十字以上五十字以内で解答欄(記述解答用紙)に記せ。その際、次の条件にしたがうこと。

一 「人間」および「他人」という語を文中に用いること(ただし、カギカッコをつけなくてよい)。

二 句読点や符号の類も字数に数えること。

三 文頭の一マス目を空けないこと。

問二十七 問題文の趣旨と合致しないものを、次のイ～ホの中から二つ選び、マーク解答用紙に記せ。

イ 脳波の有無で心の有無を決めることができない以上、人間の本質を問い直してロボットとの区別をしていくことが大切である。

ロ ロボットをロボットにすぎないと決めつける心が、じつは自分の仲間ではない人間を人間扱いしない狭い人間観につながっている。

ハ 他人の心というような結局は得体の知れないものを頼りにするよりは、自分の心をはっきり意思表示するほうが人間社会は円滑に機能する。

ニ あらゆる事物に靈魂の存在を認めるアニミズムはかならずしも昔の人々の迷信ではなく、現代においてこそそれが狭くゆがんだ形であらわれている。

ホ 人間と変わりのないロボットとの関わりを考えていくことによって、私たちは心のあり方をとらえ直して人間性をより開かれた豊かなものにすることができる。

〔以下 余白〕